

NJ素流協 News

平成28年4月10日
第135号

平成28年4月10日発行・発行所 ノースジャパン素材流通協同組合 〒020-0024 盛岡市菜園1丁目3-6 (農林会館5階)
TEL 019(652)7227 / FAX 019(654)8533 / <http://www.soryukyo.or.jp/index.html>

平成28年度NJ素流協事業の

出発点に立って

ノースジャパン素材流通協同組合

理事長 下山裕司

平成28年度の事業が始まりました。実際の私たちの仕事は、年度という区切りに関係なく常時継続して実行されております。ただ、国には会計年度という決まりがあつて過去一年間の総括・決算という区切りをつけ、年度の始めは新たな政策や行政に関わる計画に基づいて事業を展開していく出発点であり、企業においても前年度の収支決算を終えてその結果を踏まえながら新しい事業展開に発出する時期でもあります。このことは、

当NJ素流協においても同様でありまして、平成28年度の事業を多様かつ発展的に進めていく心構えと事業推進の方策に基づいて事業に着手する時期がこの4月であると考えております。

これまでNJ素流協は、当組合

の事業を進める基本的な考え方とその骨格・内容について、組合員会議、研修会、NJ素流協ニュース及び「真の国産材時代を実現するために」と題するパンフレットなどによって組合員各位に周知徹底を図りながら、当組合事業に対する理解と協力をお願いして事業を進めてまいりました。

さて今回、NJ素流協は平成28年度事業の開始に当たって、これまでのパンフレットを更新して『持続可能な森林経営の実現』と題する小冊子を作りました。

この小冊子は、NJ素流協ニュースの平成28年4月号とともに組合員各位のお手元に届くようにしております。この小冊子の中に今後、NJ素流協が進めていく事業の方向性とその基本的考え方について

要約しております。副題は「国産材の円滑な流通システム」と「森林資源サイクル」の構築を目指して」となっております。具体的な「事業運営の5つの柱」として、「国産材の安定供給」、「流通対象の多様化」、「人工林の森林資源サイクルの構築」、「組合員の知識・技術の向上と後継者の育成」、「企業の社会的責任(CSR)の推進」を掲げております。

とは言っても、NJ素流協の事業に対する立脚点と基本的な考え方は、NJ素流協の設立当初から一貫して少しも変わってはおおりません。従前のパンフレットでは4つの目標を定めておりましたが、それらをここで挙げてみると、①国産材の安定供給、②木質系資源の有効利用の推進、③人工林の皆伐跡地における森林再生事業への試み、④組合員の経済的地位向上と組合の経営基盤の強化、であります。これらの事業目標を新しく作成した小冊子における「事業運営の5つの柱」と対比してみると、

文言・表現は若干変わっているところがありますが、その主旨は不変であります。

例えば、「国産材の安定供給」

は全く同じであります。次に、従前のパンフレットには「木質系資源の有効利用の推進」とありますが、新しいものでは「流通対象の多様化」となっておりますものの、その主旨は変わりません。ただ、これまでの事業の積み重ねに基づき、そこから一歩進めて効率的な原木輸送システムを含むサプライチェーンの構築を目指すことを加えております。三番目の「人工林の皆伐跡地における森林再生事業への試み」は新しい表現で「人工林の森林資源サイクルの構築」となっておりますが、この数年間実行してきた新たな発想を組み込んだ森林再生実証モデル事業の段階から一歩進めて、事業としての森林資源サイクルの構築に取り組むことにするという意味であります。また、四番目の「組合員の経済的地位の向上と組合の経営基盤の強

化」は「組合員の知識・技術の向上と後継者の育成」と直截的・具体的な表現になっております。その理由は、組合員の経済的地位の向上を図るためには組合員各自の知識・技術を高めることが不可欠でありますし、自らの事業を継続・発展させていくためには後継者がいなければなりません。その結果として組合員の活発な事業活動と安定的な経営運営が続く限り、N J素流協は健全な経営基盤を強化・持続させることが可能となるのであります。

この小冊子に新たに加わった項目は、「企業の社会的責任(CSR)の推進」であります。企業の社会的責任とは、企業が事業活動を行うとき、自らの企業の従業員、その家族、取引先や消費者、株主、地域社会などその企業を取り巻く多くの関係者に大なり小なり影響を及ぼすこととなります。その影響が良いものであるときには、そのことを事業の実行を通じて助長すれば良いことですが、もしマイナスの影響

を及ぼしたり悪影響が予測される場合には、その悪影響を最小限に抑えたりあらかじめ予防措置を取る必要があるという考え方です。これからの企業は、この社会的責任を踏まえた経営活動が強く求められることになるでしょう。

しかし、ある会社(企業)がこの世のありとあらゆる問題を解決し、すべての人を幸福にできることなど不可能でありますから、その会社独自の事業の中において、地域社会を含めた関係者と共有できる価値を創り出す努力をするということになります。すなわち、会社の事業活動に密接した社会問題の解決が可能な分野に力を入れることとなります。なぜならば、地域社会や関係者と共有できる価値を創り出すために必要な技能・技術、人材は事業活動の中に蓄積されており、会社の事業における利益を得るための経営活動と社会問題の解決のための活動を一体的に行うことができるからです。

この考え方を普段から事業の中

で実行することは、地域社会等だけでなく会社も利益を得ることに繋がっていきます。そして、この両者の間には共通の認識と理解が醸成されるとともに、会社はその地域社会に認められてしっかりと定着して、より持続可能な競争力を保持し続けることができることとなります。捕捉すれば、会社は、CSRの領域(自らが社会的責任を果たすべき範囲や内容)の見直しを絶えず図っていくことが必要であります。なぜならば、社会・環境問題に対する会社への社会的期待は、事業を実行する地域によって異なる場合が多く、時間の経過とともに刻々と変化するからであります。

N J素流協の事業運営については、第3ステージの段階に入りました。新たな心構えで前進してまいる所存であります。今後とも関係者の皆様におかれましては、N J素流協に対しまして一層のご理解とご協力をお願いする次第であります。

トピックス

地域けん引型林業経営 体成果発表会で組合員 が発表

平成27年度の地域けん引型林業経営体成果発表会(主催・岩手県森林整備課)が3月9日、盛岡市のエスポワールいわてにおいて開催され、関係者約70名が出席した。

はじめに地域森林経営プランの取組み状況について7事業体による成果発表が行われ、当組合の組合員からは(有)道又林業(宮古市)代表取締役の野邑計氏と、ふるさと木材(田野畑村)代表の畠山辰也氏の2名が発表した。このうち(有)道又林業の野邑社長は「魅力ある林業の創造」をテーマに、地域林業フォーラムの



写真1 優秀賞を受賞した(有)道又林業野邑社長

開催や森林経営受託に向けた地域活動、安全な作業用ユニフォームの導入等の取組みについて報告し、審査員による審査の結果、優秀賞を受賞した(写真1)。なお、最優秀賞は岩手中央森林組合が、もう一つの優秀賞は奥州地方森林組合が受賞した。

続いて、新たに地域森林経営プランを策定した事業体による同プランの発表が行われ、横澤林業(岩手町)、(有)谷地林業(久慈市)、二戸林業(二戸町)、本宮木材(二戸町)の4名が発表し、新たに地域けん引型林業経営体として認定された(写真2)。いずれも当組合の組合員である。

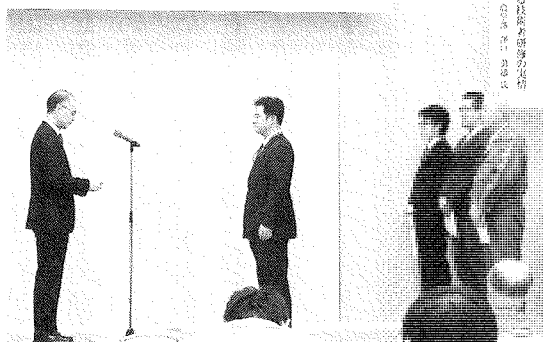


写真2 地域森林経営プラン認定書が授与された

山形県で低コスト再造林 の取組みを報告

山形県林業・木材産業再生協議会と山形県森林組合連合会主催の「平成27年度伐採・造林一貫システム講習会」が3月11日、山形市において開催され、当組合の外館経営企画部長がN J素流協の取組みについて事例発表を行った。講演等のテーマは次のとおり。

- 1 講演「伐採・植林一貫作業システムとコンテナ苗の活用」にむけて」
- 講師：森林総合研究所東北支所 森林資源管理研究グループ長 天野智将氏
- 2 事例発表

- (1)「一貫作業システムの実施結果について」(東北森林管理局置賜森林管理署業務グループ係員 伊達義人氏)
- (2)「民有林で実施した再造林の低コスト化への試み事例」(N J素流協 外館経営企画部長)

広域流通型流通体制構築 事業成果報告会に出席

平成27年度広域流通型流通体制構築事業の成果報告会(主催・一般財団法人

日本木材総合情報センターほか)が3月16日、東京都内において開催され、全国7ブロックの広域原木流通協議会構成員と林野庁、木材関係団体から約40名が出席した。東北地区協議会からは、当組合より2名が出席した。

はじめにNPO法人活木活木森ネットワーク理事長の遠藤日雄氏による基調講演「素材生産業の進むべき道」が行われ、続いて各協議会の取組みの成果について報告が行われた。

東北地区協議会からは、当組合外館経営企画部長が27年度の取組み事項について報告し、特に原木運搬にかかる素材生産業者・運搬業者・加工業者の三者

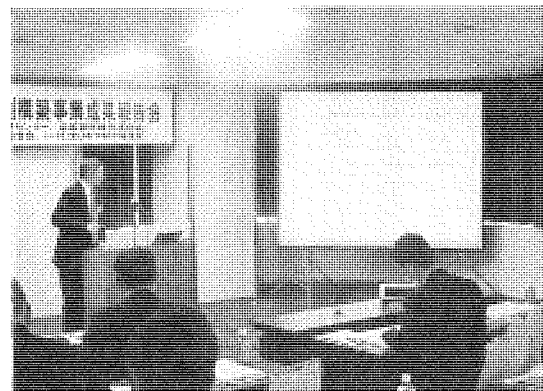


写真3 東北地区協議会の報告の様子

による情報共有の取組みについて、現状調査や協議の結果を報告した。

第3回理事会を開催

N J素流協の平成27年度第3回理事会は3月17日、盛岡市において開催され、理事9名、監事2名が出席した。

平成27年度収支決算見込み、28年度事業計画等の議案について審議が行われ、全て原案通り可決された。

木材輸出連携検討会に出席

日本産木材ブランドの確立に向けた輸出連携検討会(3回目)が3月18日、東京都内において開催され、当組合下山理事長が委員として出席した。

政府は、農林水産物・食品の輸出額を平成32年までに1兆円水準とするという目標を掲げ、木材輸出においては中国、韓国、台湾を重点対象国・地域と位置付けて、輸出に取組む木材産地・事業者の活動を支援している。

主催した一般社団法人日本木材輸出振興協会は、日本産木材輸出連携の取組みの方向性を示す基本的な指針を「日本

産木材輸出連携の推進に向けて(論点整理)」として今般取りまとめ、同検討会において素案を提示した。

これによると、我が国の木材輸出額は平成24年の93億円から、25年の123億円、26年の178億円、27年の229億円へと急速に増加している。27年の木材輸出額を輸出先国・地域別に見ると、中国(38・7%)、韓国(16・5%)、フィリピン(15・2%)、台湾(9・1%)で全体の約8割を占めている。品目別では、原木(41・1%)、製材品(15・4%)、合板(13・2%)、その他木工品(11・1%)などとなっており、原木、合板の割合が増加、製材品の割合が減少してきている。

また木材の輸出に当たっては、輸向向け木材製品の供給の確保、海外における日本産木材製品の認知度・評価の向上等の課題を解消するため、事業者個々の取組みから、オールドジャパンの供給連携体制への転換が望ましい、とされている。今後、各取組み主体(製造・流通・貿易事業者や各地の輸出連携組織、林業・木材産業関係団体等)は、輸出連携に対する意識の醸成、関係者の意識改革及びスキルアップ等を図ることとしている。

帯広素生協来訪

3月18日、当組合と交流のある帯広地方素材生産事業協同組合の高松勝行理事長及び構成員13名が視察のため岩手県を訪れた。一行は岩手県盛岡市木材流通センターほかを見学し、広葉樹やアカマツ丸太の種類の多さと質の高さに感心した様子だった。

花巻バイオマス発電所納材説明会を開催

花巻第1工業団地(花巻市大畑)に建設中の(株)花巻バイオマスエナジー木質バイオマス発電所にかかる第2回納材説明会を3月23日、花巻市交流会館及び現地において開催し、組合員等約50名が出席した。関連施設である花巻バイオチップ(株)のチップ工場は3月末に完成、発電所も今秋完成する予定。

はじめに事務局から木質バイオマス証明に必要な「原木納入開始届」等の記載方法について説明した後、参加者は発電所付近に新たに設けられた燃料用原木貯木場に移動し、計量の手順や原木の置き場所等を現地で確認した。

林業講座打合せ会議を開催

3月31日、盛岡市において林業講座打合せ会議を開催し、組合員の若手後継者等を対象とした林業講座(仮称)の新年度からの開催について検討を行った。若手後継者等19名が出席した。

今般行ったアンケート調査の結果によると、受講したい項目として労働安全、森林調査、GIS・GPS・空中写真等の活用、人材育成、路網作設等への要望が多かった。

事務局では今回の検討事項を取りまとめ、新年度事業計画に反映させることとしている。



写真4 若手後継者が意見交換した

主要木材の需給見通し
(H28第2四半期～第3四半期)

林野庁は、平成27年度第4回木材需給会議を3月23日に開催し、「主要木材の需給見通し(平成28年第2四半期(4～6月)及び第3四半期(7～9月))」を策定した。

1 経済情勢等

平成26年度の実質GDP成長率は、消費税率引き上げ前の駆け込み需要の反動によりマイナス1.0%の成長となった。27年度はその影響も薄らぎ、0.6%の成長と見込まれる。

平成27年度の新設住宅着工戸数(見通し)は、対前年度比103.3%の90万9千戸と想定。28年度(見通し)は対前年度比102.1%の92万8千戸と想定される。

2 木材輸出動向

平成27年の木材輸出額は229億円(対前年比129%)と平成以降最高額となった。

3 主要木材需給動向

(1) 国産材丸太の需要

製材用丸太については、住宅ローン金

の低下により第2四半期、第3四半期とも前年比増加が期待できる。
合板用丸太については、第1四半期から第3四半期までほぼ同水準で推移し、第2四半期は前年比で減少、第3四半期は前年並みとなる見通し。

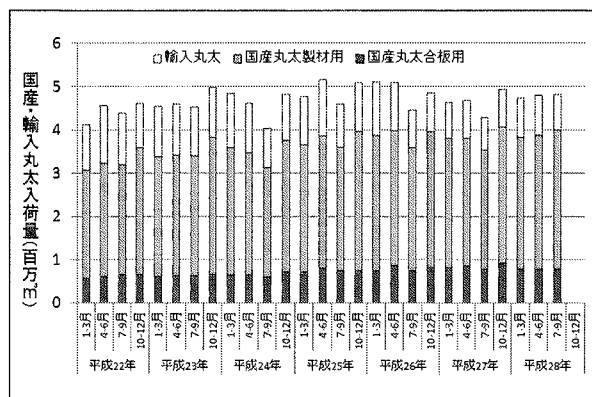


図 丸太入荷量の推移 (H28.1月以降は見通し)

(2) 輸入丸太・製材品の需要

輸入丸太については、第2四半期は前年比で増加、第3四半期は前年比で減少する見通し。輸入製材品については、第2四半期は前年比で減少、第3四半期は前年並みとなる見通し。

(3) 合板

国内製造合板の需要は、消費税増税前

の駆け込み需要により第2四半期は前年比で増加、第3四半期は同水準で前年並みとなる見通し。供給については第2・第3四半期ともに前年比で増加する見通し。輸入合板については、駆け込み需要等の要因により需要、供給のいずれも第2四半期、第3四半期ともに前年比で増加する見通し。

(4) 構造用集成材

国内製造については、駆け込み需要等の要因により第2四半期は前年比で増加、第3四半期は同水準で前年並みとなる見通し。輸入については、欧州大手メーカーの生産供給が安定化すると見込まれるため、第2四半期、第3四半期ともに前年比で増加する見通し。第3四半期は供給過剰気味になることも予想される。

山火事多発シーズンに突入

仙台管区気象台が3月25日発表した東北地方の4～6月の天候の見通しによると、期間中気温は平年より高め、降水量はほぼ平年並と予測されている。岩手県内では、平成26年は37件(年間

の約8割)、27年は24件(年間の約5割)の林野火災が4～5月に発生しており、本年も火災が発生しやすい気象条件が見込まれることから、組合員の皆様には火の取り扱いに十分注意していただくようお願い致します。

「誓います 森の安全 火の始末」

岩手県がクマ出没注意 報発表

岩手県は3月15日、「ツキノワグマの出没に関する注意報」を発表した。岩手県と東北森林管理局の調査によると、昨年(平成27年)の県内奥羽山系のブナの実は豊作だったが、今年28年は凶作と見込まれている。ブナが豊作の年の翌年は生まれる子グマの数が例年より多いとの報告もあり、今年春先に子連れのクマが多く出没する可能性が高く、夏から秋にかけては山中の餌が不足し人里に出没する恐れがある。

山仕事や山菜取りなどの際はクマよけの鈴やラジオを携帯するなど、対策を講じてから山に入るよう心がけたい。

今月の名木・巨木

32 (岩手県岩手郡岩手町)

岩手町指定天然記念物

子抱の一本杉

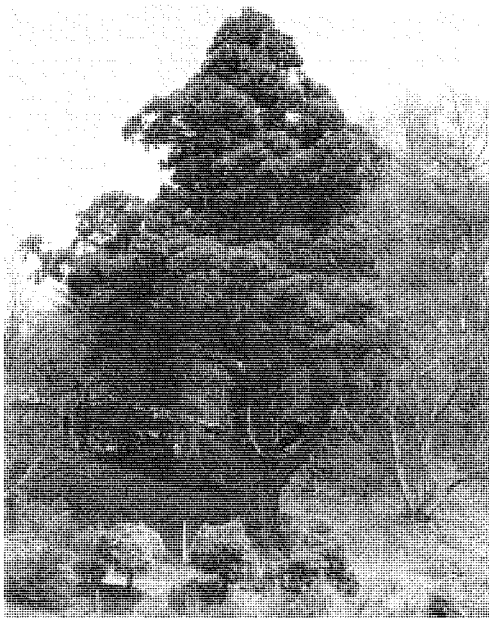
指定…2015年4月1日

所在…岩手郡岩手町子抱

盛岡市の北側に隣接する岩手町は、北緯40度線上に位置し、ホッケーや彫刻の町として知られている。今年8月に開催されるリオデジャネイロオリンピックに出場を決めた女子ホッケー日本代表「さくらジャパン」の代表候補選手として同町出身者3名が選ばれているほか、10月に開催される希望郷

いわて国体では、同町内の会場でホッケー競技が行われることとなっている。

子抱の一本杉は、盛岡市から国道4号線を北上し、川原新田のドライブイン手前を左折して500mほど進んだ山側斜面中腹にある。樹高約24m、幹周約6・5m(現地案内板より)、樹齢は不明とされているが、ゆうに数百年は経過していると思われる重厚な巨木である。町の天然記念物として指定されたのは昨年の4月1日とごく最近のことであるが、周辺は美しく整備されており、



町や地域の方々の手で大切に保存されてきたことがうかがえる。枝を左右に広げた姿は訪れる者を「ようこそ」と迎えているようにも見える。一本杉の眼下には同町御堂の「弓弭(ゆ

はず)の泉」に源を発する北上川が流れ、そのすぐ先では盛岡市玉山区藪川の岩洞湖付近に源を発する丹藤川が東から合流している。丹藤川溪流では春には藤やツツジの花、秋には紅葉を楽しむことができるほか、子抱地区には秋の紅葉の見事さから「奥の嵐山」と呼ばれる子抱山もあり、釣りに散策にゆつくり訪れたい地区である。



「林業・木材製造業 労働災害防止規程」 変更のポイント③

▽簡易架線集材装置による危険防止措置(新設)

簡易架線集材装置(原木等の一部が地面に接した状態で運搬する架線集材設備)による作業を行う

場合には、次の場所に作業者を立ち入らせてはならない。

①原木等を荷掛けし、又は集材している場所の下方で、原木等が転落し、又は滑ることにより、作業者に危険を及ぼすおそれのあるところ。

②作業索の内角側で、索又はガイドブロック等が反発し、又は飛来することにより、作業者に危険を及ぼすおそれのあるところ(図)。
③柱上作業が行われている場所の下方で、器具や工具等の落下により作業者に危険を及ぼすおそれのあるところ。

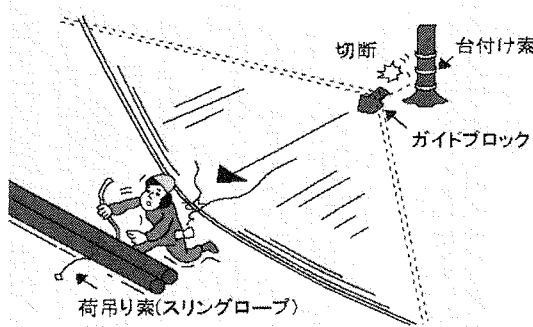


図 作業索の内角側の危険箇所(林業・木材製造業労働災害防止協会パンフレットより)

平成28年3月分の販売実績

樹種	合板用			その他 製材用等			計		
	当月出荷量 (m ³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)	当月出荷量 (m ³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)	当月出荷量 (m ³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)
スギ	6,834	92.4	113.3	6,221	96.4	217.2	13,055	94.2	146.8
カラマツ	2,828	100.7	156.5	2,198	61.6	89.0	5,026	78.8	117.5
アカマツ	1,375	46.9	51.9	274	71.3	61.4	1,649	49.8	53.3
その他針葉樹	84	*	*	0	*	0.0	84	*	88.2
広葉樹	0	*	*	0	*	0.0	0	*	0.0
合計	11,121	84.7	106.1	8,693	83.5	143.0	19,815	84.2	119.6

樹種	バイオマス用素材		
	当月出荷量 (t)	前月比 (%)	前年同月比 (%)
スギ	1,757	141.3	100.8
カラマツ	719	154.4	294.8
アカマツ	2,059	128.3	187.1
合計	4,535	136.9	146.9

樹種	今年度累計			
	合板用 (m ³)	その他 製材用等 (m ³)	計 (m ³)	バイオマス (t)
スギ	86,037	70,542	156,579	21,309
カラマツ	39,842	16,649	56,491	18,585
アカマツ	26,377	2,200	28,577	14,268
その他針葉樹	497	112	609	0
広葉樹	0	1,344	1,344	0
合計	152,753	90,847	243,600	54,162
目標達成率(%)	82.6	106.9	90.2	51.3
計画量	185,000	85,000	270,000	105,500

注) *印は前月又は前年同月実績がなかったことを示す。

【平成28年3月の需給動向】

- 製材・合板共にスギ原木の受入制限がある。特に大径木は非常に納入が厳しい。
- カラマツ原木は依然不足状況の為、引き合いが強く価格高騰も予測される。
- アカマツの伐採もピークとなり出材は多いが受入制限もあり、思うように納入できない状況。

落穂拾い

4月2日(土)に急遽、花見に行くことになった。妻に唆(そそのか)されたのである。どうも一昨日あたりに都内に住む息子に「東京の桜の名所に連れて行ってくれ」と催促したらしい。その心根は、息子からさっぱり音信がないので花見をダシにして会って生死を確認したいということである。四谷の駅で、朝7時に落ち合うことにしたという。何でそんな早い時間かと思ったが、ブツブツ言うやうに強い反発があるのは必定、黙っていた。御老体の落穂拾い子は早起きが習い性になっていたので、「7時でなくて、5時でも6時でもいいよ」と言ったら、「それなら代々木公園の桜を見てから四谷に行っても間に合うわ」と言う。余計なことを言ってしまったと後悔したが、後の祭りである。そこで5時に出発したが、駅から公園まで歩いて15分程度である。代々木公園は、先月の当欄に書いた「明治神宮の森」に隣接しているのだが、道路から公園を望むと桜の花など見えない。「本当に桜の木があるか?」と聞くと、自信たっぷり「ここには孫の自転車の練習に何度も来て見ているから大丈夫です。公園の入り口に回って中に入っていくと、在った、在った。けっこの桜の木の群落がそこちにあるのである。そして満開である。最近桜の開花が早くなる傾向にあるが、それでも今年はずいぶん早い。朝早いので、花見をしている人はいないが、どの桜の木の下にも青色のシートが敷かれており、桜樹から少し離れたところで、若い数人の男性がシートを広げている。そうか、場所取りなのである。敷き終ったシートの上に毛布を体に巻いて

て寝入っている者もいる。日本人は桜が好きだね。それにしても桜の花は見頃ではあった。原宿の駅から四谷に向かった。四ツ谷駅で息子に会うと、母親の方は、桜などそつちのけでなんだかんだと彼に話し掛けている。凶星だ、母親の子を思う気持ちは男親とはちよつと違うね。上智大学の校舎と環状線の間には塹があるが、その上に幅2〜3mの歩道があってその両サイドが桜の並木になっている。この桜は見事であった。東京にはこんなに桜が多かったのか。

わが国において桜を和歌に詠い込むのは平安朝時代に入ってからで、それ以前の奈良時代は「花」と言えば梅の花であった。万葉集には梅の歌118首とずいぶん和歌の題材になっているけれども桜の歌は44首で圧倒的に梅が優勢である。日本の「花」が梅から桜に代わっていったのは平安中期からで「花」といえば桜を指すようになっていく。

古今和歌集の仮名序で王仁の和歌「難波津に咲くやこの花冬ごもり今は春べと咲くやこの花」の花は梅である。ところが、平安時代の歌人である紀友則の和歌「ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花ぞ散るらむ」の花は桜である。桜の花を最も愛した平安末期の西行法師の「願はくは花の下にて春死なんそのきさらぎの望月のころ」は有名である。平安時代以降若干の盛衰はあるけれども、桜は日本人に愛され続けてきた。アメリカ合衆国のポトマック河畔の桜は日米友好のために時の東京市長尾崎行雄が寄贈したものであり、外交にも寄与している。

さて、桜談義はこの辺でやめておこう。4月2日の桜行脚の後、万歩計を見たら1万8千歩も歩いていて、疲れた、疲れた。